

平成26年度購入文化財一覧

【九州国立博物館】(計13件)

- 1 ○種 別 <絵画>
 ○名 称 絹本着色釈迦三尊二比丘十六羅漢図
 (けんぼんちやくしよくしゃかさんぞんにびくじゅうろくら
 かんず)
- 指 定
 ○作 者 等
 ○時 代 鎌倉時代・13世紀
 ○品 質 絹本着色
 ○員 数 1幅
 ○寸 法 等 本紙：縦103.7cm 横55.4cm 表具：縦181.0cm 横73.8cm
 軸長78.8cm
- 作品概要
 釈迦三尊と十大弟子のうちの阿難・迦葉、さらに十六羅漢を
 加えた計23尊を描いた、きわめて珍しい組み合わせの諸尊
 図。制作年代については、描線や色彩感覚が鎌倉時代・13世
 紀に描かれた「観経十六観変相図」(重要文化財、京都・長
 香寺所蔵)などに近似し、諸尊の体軀や衣文線の重ね方に北
 宋・雍熙2年(985)造立の「釈迦如来像」(国宝、清凉寺所蔵)
 胎内に納められた「靈山変相図」(国宝、北宋時代)に近い
 造形感覚を示すことなどから、宋代絵画、とくに版画あるい
 は拓本を祖本とする13世紀の作と推測される。異色の図像
 として稀少であると共に、鎌倉時代における宋代絵画の受容
 を考えるうえで欠かすことのできない貴重な作品である。
- 来 歴
 ○購入金額 5,000,000円(平成26年度第1回鑑査会議)



- 2 ○種 別 <絵画>
 ○名 称 紙本墨画淡彩陶淵明愛菊図 伝周文筆・瑞溪周鳳賛
 (しほんぼくがたんさいとうえんめいあいきくず でんしゅ
 うぶんひつ・ずいけいしゅうほうさん)
- 指 定
 ○作 者 等 伝周文筆・瑞溪周鳳賛
 ○時 代 室町時代・15世紀 文明4年(1472)賛
 ○品 質 紙本墨画淡彩
 ○員 数 1幅
 ○寸 法 等 本紙：縦78.2cm 横23.9cm 表具：縦151.5cm 横26.4cm
 軸長30.6cm
- 作品概要
 中国・六朝時代の詩人・陶潜(陶淵明、365-427)が、道服を
 つけ杖をもって歩む姿を描く。作者については足利将軍家の
 御用絵師・周文(?-1454-?)の伝承があり、上部には鹿苑僧録
 をつとめた文筆僧・瑞溪周鳳(1392-1473)が81歳で記した賛
 文がある。陶淵明は、自然を愛して田園生活を送った隠逸詩
 人として、日本ではすでに平安時代にはよく知られた存在で
 あるが、関連する古い絵画作品は数少ない。新出資料である
 本図は、室町時代における中国文人文化の受容を考える上で
 重要な資料である。その人物の姿形は、東アジアにおいて伝
 統的に描き継がれた図像を受け継いでおり、とくに応永32年
 (1425)着賛の陶淵明賞菊図(重要文化財、梅澤記念館所蔵)
 に共通しており興味深い。
- 来 歴
 ○購入金額 10,000,000円(平成26年度第1回鑑査会議)



- 3 ○種 別 <絵画>
 ○名 称 紙本墨画山水図 伝狩野玉楽筆
 (しほんぼくがさんすいず でんかのうぎょくらくひつ)
- 指 定
 ○作 者 等 伝狩野玉楽筆
 ○時 代 室町時代・16世紀
 ○品 質 紙本墨画

○員数 1幅
 ○寸法等 本紙：縦85.6cm 横31.5cm 表具：縦167.4cm 横43.6cm 軸長48.4cm

○作品概要 墨一色で晩夏から初秋にかけての景観を細やかに描き出す。その特徴は墨点で立体感を描写する米法山水の主山である。この表現は中国・宋時代の文人画家の山水画に由来するもので、とくに元時代に盛行したが、日本・室町時代には作例が多くない。そのため米点や無根樹などの描法を採用する本図は、米法山水の表現を学んだ室町水墨画の一つとして貴重である。作者については、狩野元信(1477-1559)に学び小田原で活躍した狩野玉楽の伝承がある。そのため本図は、京都の狩野派に学んだ関東水墨画の優品として重要であり、文化交流の観点からも独自の位置づけを持つ米法山水として貴重である。

○来歴
 ○購入金額 2,500,000円(平成26年度第1回鑑査会議)



4 ○種別 <絵画>
 ○名称 紙本墨画松に叭叭鳥・柳に白鷺図 六曲屏風 狩野永徳筆
 (しほんぼくがまつにははちょう・やなぎにしらさきず
 ろつきよくびょうぶ かのうえいとくひつ)

○指定
 ○作者等 狩野永徳筆
 ○時代 室町～安土桃山時代・16世紀
 ○品質 紙本墨画
 ○員数 1双
 ○寸法等 本紙：各縦160.5cm 横351.0cm 折畳時：各縦176.3cm 横62.0cm 厚11.4cm

○作品概要 近年再発見された、狩野永徳(1543-1590)の花鳥図の大作である。本作品は、数少ない永徳の大画面花鳥画であることに加え、その代表作「花鳥図」(国宝、京都・大徳寺聚光院所蔵)に酷似しており、日本美術史において極めて重要な価値をもつ。右隻では、松のまわりを叭叭鳥が舞い、勢いよく流れる滝や葦などが潑刺とした春の景色を表している。左隻は、芦が茂る穏やかな秋の水辺の景で、柳のそばで白鷺が羽根を休める。安定感のある構図に、春と秋、静と動、黒い叭叭鳥と白い鷺を対比的に表わした、理知的な構成である。永徳の祖父・元信が確立した端正な花鳥図を継承しつつ、桃山時代の豪壮な様式の到来を予感させる、極めて重要な作品である。

○来歴
 ○購入金額 540,000,000円(平成26年度第1回鑑査会議)



(右隻)



(左隻)

5 ○種別 <書跡>
 ○名称 藍紙墨書大方広華嚴経巻第十五(泉福寺焼経)
 (らんしほくしょだいほうこうぶつげごんきょうまきだいじゅうこ(せんぶくじやげぎょう))

○指定
 ○作者等
 ○時代 平安時代・12世紀
 ○品質 藍紙墨書
 ○員数 1巻
 ○寸法等 縦25.5cm 全長1279.1cm

○作品概要 「泉福寺焼経」は平安時代12世紀初期の装飾経の優品で、河内国・泉福寺に伝来した。ある時期に火災に遭い、経巻の上下端が焼損したことからこの名で呼ばれる。漉染めの藍色の料紙に、金の揉箔を散らし、金泥界を引いた中に、『大方広華嚴経』(旧訳華嚴経、仏馱跋陀羅訳、60巻本)を楷書体で書写する。本作品は、卷子装で、巻第十五(「如来昇兜率天宮一切宝殿品第十九」「兜率天宮菩薩集讚仏品第廿」)が1行17字詰で26紙にわたって書写される。「泉福寺焼経」は、戦後



(巻頭)



(巻末)

に十巻前後が巻間に出て、存在が知られるようになった。巻子のかたちで伝わる僚巻が、東京・京都・奈良の国立博物館、根津美術館、立命館大学などに所蔵される。本作品も僚巻同様、和様の筆致で一貫して書写されるが、点画の丸みが強調される以前の端正な楷書体の字姿を留める。また、本作品は、焼損痕も含めてうぶな状態であり、巻末の軸木と上端の軸先を遺存する。

○来歴
○購入金額 19,440,000円（平成26年度第3回鑑査会議）

6 ○種別 <彫刻>
○名称 阿弥陀如来坐像
(あみだによらいざろう)

○指定
○作者等
○時代 平安時代・10世紀
○品質 木造 漆箔・彩色 彫眼
○員数 1 軀
○寸法等 像高 56.0cm
○作品概要

両手屈臂として腹前で左手の上に右手を重ね置く弥陀定印を結び、右足を外にして結跏趺坐する阿弥陀如来像。両腕の遊離部を含めて広葉樹（ケヤキか）の縦一材から彫出し、内割りを施さない古式の一木彫像である。大きく張り出す胸肉、圧倒的に肥満した体軀、翻衣式の名残が認められる幅広の衣襷など9世紀彫像の特徴を濃厚に示すが、肉髻と地髪の段を不明瞭に尖っているように見える頭部の形、仰月形の目と小さな鼻や唇を配する面貌など、京都や琵琶湖周辺に伝存する10世紀の天台系如来像に見出される特徴が多く認められる。よく整えられた衲衣の衣襷、右足首にまとわる裳先の折り返しを幅広い真円形に表現する点、衲衣を通して左胸肉の張りや右足の指先を明瞭に表現する点など、本像では着衣の質感と肉身性の強調に特別の関心が払われていることが注目される。



○来歴
○購入金額 86,400,000（平成26年度第2回鑑査会議）

7 ○種別 <漆工>
○名称 龍鳳彫彩漆合子
(りゅうほうちょうさいしつごうす)

○指定
○作者等
○時代 中国・明時代・嘉靖年間(1522-66)
○品質 木製漆塗
○員数 1 合
○寸法等 径 29.2cm 高 13.3cm
○作品概要

木製漆塗。円形、印籠蓋造の合子。蓋表中央に靈芝をあらわし、その上に丸枠で囲んだ寿字を篆書体であらわして、上に逆卍をあらわす。その左右には鳳凰と龍を、間隙を雲文地とし、靈芝雲をあらわしている。さらに肩と尻の部分には、波文地に朱色と緑色の龍を二匹ずつ交互に配し、龍と龍の間には靈芝雲をあらわす。色漆を塗り重ねた漆層に文様を彫り表す彫彩漆技法は、明時代・嘉靖年間に隆盛を迎えた。また、さまざまな吉祥文や文字を組み合わせる器物を飾る作風は、明時代・嘉靖年間(1522-66)から盛んになり、後の隆慶年間(1567-72)、万暦年間(1573-1620)へ引き継がれた。本作は嘉靖期彫彩漆の典型作であり、同趣の作例は、北京・故宮博物院や台北・国立故宮博物院などに所蔵されている。



○来歴
○購入金額 37,800,000円（平成26年度第3回鑑査会議）

8

○種 別 <染織>
○名 称 茜地幾何学文更紗儀礼用布
(あかねじきかがくもんさらさぎれいようふ)

○指 定
○作 者 等 インド・コロマンデル海岸か

○時 代 17~18 世紀
○品 質 木綿単糸平織
○員 数 1 枚

○寸 法 等 縦 656.0cm 横 83.5cm

○作品概要 木綿単糸平織。両面染め、媒染模様染め・蠟防染模様染め(手描き)。蠟防染で染め抜かれた3本線が中央部と周囲を区画する。中央部には、方形を組み合わせた「格天井」文様を中心に花形を表す幾何学文様と、破風のような三角形に十字を組み合わせた建物風の文様を交互に配す。周囲のうち長辺の両側の区画は、一方は正方形をピラミッド状に積み上げた山形を連続させ、もう一方は三角形と凸形を組み合わせた文様を連続させる。切り取りによる欠失部が一か所あるものの、完形をほぼ残す点で貴重である。

○来 歴

○購入金額 2,500,000 円 (平成 26 年度第 3 回鑑査会議)



○種 別 <染織>
○名 称 浅葱地椿燕文紅型衣裳
(あさぎじつばきつばめもんびんがたいしょう)

○指 定
○作 者 等 琉球
○時 代 琉球・第二尚氏時代~明治時代・19~20 世紀
○品 質 木綿単糸平織
○員 数 1 領

○寸 法 等 丈 120.0cm 衿 64.3cm

○作品概要 型染め、両面染め。単仕立て。牡丹文を主文として、瑞雲、飛翔する燕を配した大文様の紅型衣裳。浅葱色の地色上に赤、黄、茶、緑、藍色にて文様を染めている。肩山で文様の向きを変える染め方はせず、前身左右ともに模様は上向きで、後身は下向きとなっている。本品は、広袖で身八つ口の開口部分をつくらないなど琉服の形を残すが衿は和服の特徴である棒衿に変化している。

○来 歴

○購入金額 2,500,000 円 (平成 26 年度第 3 回鑑査会議)



10 ○種 別 <染織>
○名 称 黄地松皮菱繋ぎ檜扇団扇菊椿文紅型胴衣
(きじまつかわびしつなぎひおうぎうちわきくつばきもんびんがたどうじん)

○指 定
○作 者 等
○時 代 琉球・第二尚氏時代・19 世紀
○品 質 木綿単糸平織
○員 数 1 領

○寸 法 等 丈 91.5cm 衿 64.5cm

○作品概要 型染め、片面染め。元は袷仕立てと考えられるが現状は裏地なし。松皮菱繋ぎ文に、檜扇、団扇を中心に椿、菊を配した大模様の胴衣で、松皮菱に市松文様を充填させた文様は、鹿の子絞りあるいは摺匹田を模したものと考えられる。黄色の地色上に赤、橙、紫、茶、緑、藍色にて文様を染めている。胴衣には脇(体側)にスリットをいれるものもあるが、本品は脇を縫い閉じている。衿付けは袋縫いで上前衿には3本襷を入れる。胴衣(ドウジン)とは上衣のことで、カカンと呼



ばれる裙（巻きスカート）とともに二部式の衣裳として着用された。

○来歴

○購入金額 2,500,000円（平成26年度第3回鑑査会議）

- 11 ○種別 <考古>
○名称 伝青森県つがる市森田町床舞出土 長胴異形壺形土器
（でんあおもりけんつがるしもりたまちとこまいしゅつど
ちょうどういぎょうつぼがたどぎ）

○指定

○作者等

○時代 縄文時代・前1000年～前400年

○品質 土製

○員数 1点

○寸法等 高33.2cm 直径6.8cm

○作品概要 非常に長い胴部を持つ壺形もしくは徳利形の土器。器壁は手握土器風の凹凸を持ち、肩部から胴部にかけて全面に雲形の磨消縄文が施されている。東北地方の縄文時代晩期の文化として著名な亀ヶ岡文化の土器で、本例のような形態を持つものは大変希少である。この文化の後半は、西日本では既に水田稲作が伝わっており、弥生時代が始まっている。亀ヶ岡文化の土器は、西日本各地でも出土し、弥生土器の成立にも大きな影響を与えており、当時の文化交流を考える上で大変重要である。



○来歴

○購入金額 2,916,000円（平成26年度第3回鑑査会議）

- 12 ○種別 <歴史資料>
○名称 紙本墨書徳川家康御内書
（しほんぼくしょとくがわいえやすごないしょ）

○指定

○作者等

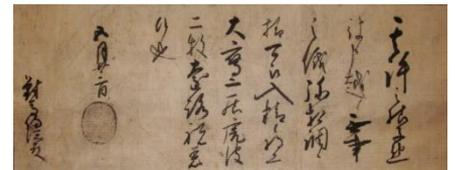
○時代 江戸時代・慶長10年(1605)

○品質 紙本墨書

○員数 1幅

○寸法等 本紙：縦23.2cm 横59.1cm 表具：縦104.8cm 横61.5cm
軸長66.8cm

○作品概要 徳川家康(1542-1616)が対馬の大名・宗義智(1568-1615)に宛てた御内書。差出書の部分に「源家康」と刻する重廓黒文楕円印を捺し、宛所は「対馬侍従殿」とする。文書様式・内容からみて、発給年月は慶長10年(1605)5月と考えられる。文禄・慶長の役(1592-98)後の日朝講和交渉の過程において、慶長10年3月、宗義智は対馬を訪れた使僧惟政(松雲大師)を京都・伏見城まで誘導し、大御所徳川家康・将軍秀忠との会見を実現させた。家康は義智の功績を賞するとともに、朝鮮王朝から正式の外交使節を招聘するよう命じている。本文中で「無事之儀、弥相調候様」と指示するのは、正式な講和成立のため奔走するよう指示したものと解される。



○来歴

○購入金額 2,808,000円（平成26年度第3回鑑査会議）

- 13 ○種別 <歴史資料>
○名称 紙本著色長崎唐館図及蘭館図
（しほんちゃくしょくながさきとうかんずおよびらかんず）

○指定

○作者等

○時代 江戸時代・18～19世紀

○品質 紙本著色

○員数 2巻

○寸法等 (唐館図)本紙:縦 36.6cm 横 485.5cm (4紙) 表具:縦 36.6cm521.3cm
(蘭館図)本紙:縦 36.6cm 横 404.3cm(3紙) 表具:縦 36.6cm 横 440.4cm

○作品概要 江戸時代・18世紀初頭の長崎の唐人屋敷と出島オランダ商館とにおける生活・風俗を描いた絵巻。唐館図には、唐人店(香餅・焼酒)、唐人部屋での宴席と中国楽器の演奏、土神堂の礼拝、広場での博打、小間物・食料品市など11の場面が、蘭館図には、水門、カピタン部屋の宴席と洋楽器の演奏、庭園、涼所(遊戯所)とビリヤード、など7つの場面が描かれている。両図ともに、構図が類似する諸本が神戸市立博物館など複数伝来する。景観年代は、渡辺秀石が長崎巡見に訪れた幕府勘定奉行・荻原重秀の命(元禄12年・1699)により描いた「絵図」(『唐通事会所日録』・『長崎オランダ商館日記』)との関連性から、18世紀初頭と判断される。

○来歴

○購入金額 12,000,000円(平成26年度第3回鑑査会議)



(唐館図)



(蘭館図)